

2022年4月10日（日）主日朝礼拝説教

『キリストの死と葬り』井上隆晶牧師

詩編 22 編 1～9、16～19 節、マルコ 15 章 33～47 節

### ①【メシアの三つの働き～王としての働き～】

今日はイエス様がエルサレムに入場されたことを記憶し、手に棕櫚の葉をもって礼拝します。彼は王様として入場しますが、勇ましい馬に乗ってではなく、子供のロバに乗り、柔和で低く、謙遜な姿の王様として現れます。メシアというのは「油注がれた者」という意味ですが、王様と祭司と預言者の三つの職を兼ねています。ですからイエス様は王であり、祭司であり、預言者です。イエス様の「**預言者としての働き**」は、神と神の国を教えることであり、それは既に終わっています。先週は、イエス様が十字架の上で人の罪が赦されるように祈り、自分自身を献げるといった「**祭司の働き**」についてお話ししました。最後に残っているのは「**王としての働き**」です。イエス様は茨の冠をかぶり、罪状書きには「ユダヤの王、ナザレのイエス」と書かれていました。王の仕事とは敵と戦い、自分の富を分け与え、自分の民を守ることにあります。今日は王様としてのイエス様のお話しをしましょう。

### ②【万物の終わりと万物の回復の始まり】

イエス様が十字架にかかられた時、不思議な現象が起きました。「**昼の十二時になると、全地は暗くなり、それが三時まで続いた。**」（マルコ 15：33）と書かれています。三時間に及ぶ暗闇です。イエス様のことを「**義の太陽**」といわれます。そのイエス様が死のう（沈もう）としているので、被造物である太陽も恐れて身を隠したのだと教父たちは解釈しました。詩編 88 篇はその時の様子を予言しています。「**愛する者も友も、あなたは私から遠ざけてしまわれました。今、私に親しいのは暗闇だけです。**」（同 19 節）旧約聖書ではこの太陽が暗くなる日のことを、「**主の日**」と呼びました。それはこの世の終わりに行われる神の裁きの日です。「**その日が来ると、と主なる神は言われる。私は真昼に太陽を沈ませ、白昼に大地を闇とする**」（アモス 8：9）とあります。ですからイエス様の十字架と共に、世の終わりは始まったという事なのです。神の子の体が破壊されたのに、この世が破壊されずに残るはずがありません。キリストの死と共に万物は崩壊し始めました。しかしそれと同時に、この暗闇の中で神は新しいものを創造されているのです。

### ③【神の子が捨てられた理由】

午後三時にイエス様は大声で叫ばれます。「エロイ、エロイ、レマ、サバクタニ」これは「**わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか**」という意味です。（15：34）この叫びをどのように読んだらいいのでしょうか。絶望と孤独の叫

びでしょうか？ 午後三時というと、エデンの園でアダムが罪を犯して、神様の足音を聞いた時刻です。神様が「どこにいるのか」とアダムに呼びかけた時、彼は神の顔を避けて隠れました。そこからアダムはどんどん神から離れて生きるようになりました。「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」という叫びは、すべての神から離れた人間の叫びを代表する叫びなのです。イエス様はなぜですか？と問う私たち人間と同じ者となり、私たちと共にいてくださるのです。イエス様は「神に見捨てられた」ような経験、それは死ぬという経験ですが、それをされたのです。死は命である神から最も遠い所にあります。死んだ人たちは皆、神様から最も遠い世界にいるのです。キリストは自らが死ぬ、つまり神に見捨てられることをもって、神から離れた遠い世界、死の世界にいる人たちと共におられます。

ウクライナの若い母親が、ビルの瓦礫の下敷きになって二人の内の一人の子供を亡くしました。「なぜ、誰か返して」と泣いている映像を見て、心が痛みました。避難するために駅で列車を待っている人達の上に砲弾が落ち、子供を含む50人以上の人が亡くなりました。この世はまことに理不尽です。神を信じることから私たちが引き離し、絶望を与えるような出来事で満ちています。この世の悲惨な出来事を見ると、神は共におられるということが分からなくなります。しかし聖書を見ると、神の名は「インマヌエル」といい、いつも私たちと共におられると書かれています。私たちが神を見捨てたのであって、神は私たちをお見捨てになることはありません。不幸や辛い出来後にあうことによって私たちが信じられなくなるだけなのです。神様は私たちを見捨てません。

●イエズス会の司祭シルヴァノ・ファウスティはこう書いています。「私たちは神から限りなく愛されていて、神はご自身より私たちを愛するほどなのだ。—だから神は御子を私たちに引き渡された。…十字架においてほかに、神はもう何も私たちに言うことも、与えるものもお持ちにならない。ご自分をすべて私たちに与えて下さった。十字架にすべてが現れている。…私たちは見る。命が死に、み言葉が沈黙し、主人が奴隷となり、十字架が王座となり、すべての頭である方が最後の者となり、裁き主が裁かれ、正しい人が罪人となり、祝福された方が呪われ、聖なる方が罪とされる、神は私たちとまったく同じ者となるためにご自分を捨てられる。」

イエス様は自分を完全に捨てられました。私たちを見捨てられないという事です。死の世界まで追いかけて行きます。「私はあなたたがをみなしごにはしておかない。」(ヨハネ 14 : 18) 死の中に入って行かれる人となった命の神に驚きます。

#### ④【イエス様の葬り～死を変容するため～】

37 節に「イエスは大声を出して息を引き取られた」とあります。イエス様の死と共に様々な不秘義な現象が起きました。自然界だけでなく、あらゆる物が、何が起こったのかを証したのです。それは世界の回復の始まりです。イエス様の流

された血は、呪われた大地の上に染み込みます。こうして大地の呪いは終わりました。神殿の垂れ幕は上から下まで真っ二つに裂けました。この垂れ幕には天使ケルビムの刺繍がしてありました。それはエデンに人間が入れないように守っていた天使です。その天使がキリストの死によって退けられ、エデンの園が再び開いたことを教えています。百人隊長は「本当にこの人は神の子だった」と信仰を告白しました。十字架は恐ろしく悲惨ですが、何か不思議な慰めを感じます。絶望ではなく希望を感じます。闇ではなく光を放っています。古いものが終わり、新しいものが始まったことを感じます。

この後、アリマタヤのヨセフという身分の高い議員が、イエス様の遺体を引き取り、十字架から降ろして、亜麻布で巻き、岩を掘って作った墓の中に納め、墓の入り口には石を転がしておきました。聖書は丁寧にイエス様の葬りを書きます。イエス様が本当に死に、本当に墓に葬られたことを伝えるためです。すべてが終わりました。眠ることなくまどろむことのない神が、人間の死によって眠りにつき、人間のように墓に横たわるのは意味があります。それは死の意味と性質を変えるためです。こうして死の崩壊は外からではなく、内側から始まります。面白い事に、復活した時イエス様は「おはよう」と言われました。だから死は滅びから眠りに変えられたのです。十字架までは人間イエス様の働きですが、墓の中からは神イエス様の働かれる番です。ここから神様は悪と死に対する反撃を始められます。それは次週にお話しします。

●片山はるひさんという上智大学神学部教授がいます。彼が FEBC キリスト教ラジ放送局のチラシの中でこんなことを書いています。「私が学生だった時に、とても親しい友達が癌になりました。そして二人の小さな子供を残して、もう余生が短いということが分かった時に、電話で話した言葉が今も忘れられないものとして残っています。彼女はこういったんです。「はるひさんね、あの十字架の上で、イエス様が、『わが神、わが神、なぜ私を見捨てられたのか』って言ったのは、本当にそう思ったんだと思うよ。」さらに彼女はミサについてこう語られました。「私は、イエス様のご聖体を与えた時、何かを残すんじゃなくて、自分自身を残したかったんだと思うよ。私も何かを残したいんじゃなくて自分を残したいから。自分の子供たちに、自分自身を残したいから」と。」

イエス様は、自分の命と赦しを与える聖餐式を残されました。私たちはその中で、キリスト自身の命を食べ、キリスト自身の赦しを飲むのです。毎回、「生きなさい」「あなたの罪は赦されました」という言葉を聞き、体験するのです。聖パンは十字架で裂かれたキリストの体です。ぶどう酒は流された血、命です。あなたを生きかさないはずがありません。この方の衣の房に触れるだけで病の止まるのですから。神の命に触れれば死は消滅します。神の血に触れれば聖くなります。

私たちを見捨てられないイエス様、死の世界まで追いかけて来てくださったイエス様に感謝しましょう。地獄の底で私を見つけ、敵である悪魔と死を打ち倒し、

私たちを死から解放し、自らの肩に担ぎ、天国に、命の群れに連れ帰ってくださいました。「お前は私の子だ。さあ、一緒に帰ろう」とエデンに連れて行ってくださる頼もしく、お優しい王様です。神は決してわれわれを見捨てられません。それを信じましょう。